講 演
 Lecture

産油国技術者研修事業の 25 年*

安 田 優 人**

(Received January 15, 2015 ; accepted March 6, 2015)

Twenty five years of JOGMEC-TRC Overseas Training Program

Masato Yasuda

Abstract : The Overseas Training Program conducted by Japan Oil, Gas and Metals National Corporation (JOGMEC) has a quarter century of history since 1989 including the times of JNOC, the former organization of JOGMEC. The program comprises a variety of courses regarding oil/gas upstream technologies and more than 3,000 engineers from 47 countries participated in the program. The 25 years' "steady effort" has been for providing the participants with not only the up-to-date technologies but variety of opportunities to know more about Japan. JOGMEC staff in charge of the training program always direct special consideration to their comfortable stay in Japan, however, sometimes attended by various difficulties coming from cultural differences.

Keywords : JOGMEC, training program, overseas

1. はじめに

独立行政法人石油天然ガス・金属鉱物資源機構（以下 JOGMEC）にて実施している「産油国技術者研修事業」が平成 26 年度の第 58 回石油技術協会賞業績賞の栄誉を賜りました。関係者の皆様には同事業の意義，成果をご理解いただくとともにそれを高く評価していただき，深く感謝申し上げます。この協会賞というのは本来学問，技術に関する表彰であり，業績賞は「石油・天然ガス鉱業に関する優れた業績を挙げた個人または団体に贈呈する」もので，それは「優れた技術上の業績を挙げた者」の候補の中から選ばれるというのがこれまでの流れでした。しかるに受賞の対象は〇〇の研究，〇〇の開発，〇〇の確立などの内容となり何らかの技術上の達成や革新をなし得たものとして，その意義は理解しやすかったものと思います。ちなみに 2014 年のノーベル物理学賞は日本人の手による青色 LED の発明がその対象であり，その表題も中身も一般の人にすんなりと理解しやすいものでした。ノーベル賞は世界的に著名なものでありながら，基礎科学の分野となるとその道の専門家でなければ受賞案件の語句の意味も理解できない

のがしばしばです。その意味では，この青色 LED は異色な部類かもしれません。

さてこの「産油国技術者研修事業」なのですが，なにがしかの専門家でなくても誰でも言葉の意味は理解できる一方で，業績賞とのつながりにピンとこなかった方が多いのではないのでしょうか。「産油国技術者研修事業」の概要は既報（池ヶ谷，2014）のとおりなのですが，その中身をご存じの方々も，達成や革新をなし得たことによる技術上の功績という側面から言えば毛色が違うとの印象と思います。さてこの受賞理由を要約しますと，25 年の長期にわたり産油国から研修生を日本に招聘する事業を継続するという「地道な努力」の結果，海外の業界に親日派を増やし，またその研修修了生の中には産油国政府関係で活躍する要人へと昇進する例も多々あり，それが人脈形成の源となって我が国業界の事業の「間接的」な支援につながっている，ということです。地道な努力，間接的貢献という表現をすれば，我が社にはかようなことで汗をかいているスタッフは山ほどいますよ，と言いたくなる方もいらっしゃるでしょう。ほぼ全員が初来日の何十人もの外国人とお付き合いする仕事，といえはる意味華やかな現場との姿を思い浮かべるかもしれませんが，この地道な努力というのは実の所，地味な努力の継続と言ってもいいかもしれません。本稿ではこの地道な努力の 25 年を振り返ってお話したいと思います。

* 平成 26 年 10 月 30 日，平成 26 年度秋季講演会「エネルギー確保の多様性と新技術」にて講演 This paper was presented at the 2014 JAPT Autumn Meeting entitled "Diversifying in securing energy resources and its related new technologies" held in Tokyo, Japan, on October 30, 2014.

** 独立行政法人 石油天然ガス・金属鉱物資源機構 石油開発技術本部 管理・研修部 Administration and Training Department, Oil & Gas Technology Unit Japan Oil, Gas and Metals National Corporation

2. 産油国技術者研修概要

この産油国技術者研修事業についての意義、内容についての詳細は既報に譲りますが、ここで同事業とはいかなるものかを再度簡単に説明しておきます。

2.1 研修の種類

これまで行ってきた産油国技術者研修事業における研修には以下の3種があります。

・ 通常研修

探鉱地質、物理探査、掘削マネジメント、油層工学の4コースを行っています。石油・天然ガスの上流事業において、地下の事柄を扱う基本技術にあたるものです。研修期間は1講座あたり原則10週間で、1ヵ国から1～2人、合計20人前後の研修生を招いて実施しています。この研修が25年の歴史を持つ実態として常設のものです。招聘する国は、JOGMECの事業活動や我が国企業の活動状況などを踏まえ、資源外交上の重点国をJOGMECが選定します。もっぱら産油国の政府機関、国営石油会社の人員を対象とします。

・ 特別研修

資源外交上の重点国との関係を強固にすべく、特定の国を対象として実施するものです。国またはJOGMECがある特定の国といくつかの分野で協力協定(MOU)を結ぶケースがありますが、このMOUの中で人材育成が謳われている場合当該国を対象に実施しているのがこれまでの例です。1講座あたりの人数、期間ともに通常研修より小規模ですが、講座のテーマその他のスケジュールは相手国側の要望に柔軟に対応する形で設定されるため、これは常設ではありません。LNG、HSE管理、プロジェクトマネジメント、地化学などの特定の課題に特化するケースがもっぱらです。通常研修と同じく当該国の政府機関、国営石油会社の人員を対象とします。

・ フェローシップ事業

日本の石油会社などが主体となって産油国人材の研修を行うもので、JOGMECは研修希望社を募り、その実施社に対し費用を負担するものです。産油国の政府機関、国営石油会社、大学を対象とします。なおこの事業は予算の関係上平成26年度現在中断しています。

2.2 研修施設

千葉県千葉市にあるJOGMEC技術センター(JOGMEC Technology and Research Center, 以下TRC)には研修生が最大28人収容可能な宿泊施設および研修事業用の講義室3室を備えています。食堂はJOGMEC職員他一般TRC利用者と共用ですが、研修生用に娯楽室、ランドリー施設もあり基本的に滞在に必要な環境を備えています。通常研修は常にTRC施設を使用して行い、言わばTRC内での合宿生活ですが、特別研修では講義を担当する会社の手配によりTRC外部で生活して研修を行うケースもありました。

2.3 研修生の招聘実績

平成25年度までの産油国技術者招聘人数は以下のよう

通常研修：1,102人
特別研修：1,829人
フェローシップ事業：248人

3. 研修事業の歩み

JOGMECの前身である石油公団が千葉市に石油開発技術センターの新研究所を竣工したのは昭和63年(1988年)11月であり、研究開発、技術サービス、国際研究協力および海外技術者訓練を4本柱として千葉市での業務を開始しました。この建物がそのまま現在のTRCであり、本稿のテーマである産油国技術者研修が実際に開催されたのは平成元年(1989年)5月のことです。

3.1 平成元年という年

平成元年といえば四半世紀ほど前のことになります。当時社会人に成りたての人も、今はこの道何年のベテランと称されるほどの年月が経過したことに相当するでしょう。まずここで平成元年(1989年)とはどんな年であったか振り返ってみましょう。表1がその年にあった出来事です。年が明けて間もなく昭和の時代が終わり「平成」が始まりました。今や国内では消費税10%への移行が景気回復との絡みで論議の焦点になっていますが、この消費税施行はこの年です。またバブル経済絶頂の年でもありました。翌年から日本経済は怪しくなり失われた10年あるいは20年の影が忍び寄って来ました。海外に目を移しますとベルリンの壁崩壊という大きな出来事がありました。ジャパン・アズ・ナンバーワンというフレーズや国際問題と言えば東西関係を抜きに語れない時節が記憶の中になく人も今や多いことでしょう。その転換が来た頃でもありました。油価について言えば、戦乱による変動要因はあってもバレル当たり20米ドル以下でおおむねバランスが取れていた時代でした。今世紀に入って油価が右肩上がりドルベース3桁の値を付けたたり、昨今のように急落したりと数年の間に何十ドル幅で乱高下する様は全く想像できない時代でした。なお筆者とは言えばアブダビでの3年余の滞在を終

表1 平成元年(1989年)という年

出来事	誕生
昭和天皇崩御	内村航平 香川真司 錦織圭
消費税施行	
任天堂ゲームボーイ発売	死去
竹下→宇野→海部内閣	手塚治虫 芥川也寸志 松下
天安門事件	幸之助
秋篠宮 川嶋紀子様婚約	美空ひばり 松田優作
ベルリンの壁崩壊	
日経平均株価史上最高値	大河ドラマ 春日局
新語	プリンセス・プリンセス「Diamonds」
セクシャルハラスメント	Wink「淋しい熱帯魚」
流行語	インディ・ジョーンズ/最後の聖戦
オバタリアン	

wikipedia より

表 2 平成元年 初の技術者研修の参加国一覧

第 1 回物理探鉱コース

(1989 年 5 月 22 日～1989 年 8 月 4 日 7 ヲ国, 10 機関, 11 名)

国 名	組 織 名	人数
中 国	中国海洋石油総公司 (CNOOC)	1
"	中国石油天然気総公司 (CNPC)	1
マレーシア	マレーシア石油公社 (PETRONAS)	1
"	ペトロナス・チャリガリ (Petronas Carigali)	1
インドネシア	インドネシア石油公社 (PERTAMINA)	1
"	インドネシア石油ガス技術振興本部 (LEMIGAS)	2
タイ	タイ鉱物資源省 (DMR)	1
アブダビ	アブダビ石油公社 (ADNOC)	1
オマーン	オマーン石油鉱物省 (MPM)	1
エジプト	エジプト石油公社 (EGPC)	1

出典：TRC News No.60, 1990.4 石油公団石油開発技術センター編

え、同年 4 月にでき立ての TRC に配属になった年です。と言っても配属先は油層研究室（当時）で、この研修事業が開始したのを横目で見ていたに過ぎませんでした。

3.2 産油国技術者研修の開始

当時の研修担当者は事業案内のため招聘候補国を奔走し、制度立ち上げに大変苦労されていたことを傍観の立場ながら覚えています。そして記念すべき初回の産油国技術者研修は平成元年 5 月下旬～8 月上旬に実施した物理探査コースでした。7 ヲ国 10 機関から総勢 11 人の研修生が来日しました。（表 2、図 1）当時の機関紙 TRC News No. 60（石油公団石油開発技術センター、1990）によりますと、その趣旨は「本研修制度の狙いは、産油国との人的絆・協力関係をより一層深めるとともに、石油の大消費国として世界の石油開発技術の向上にいくらかでも貢献することである。」と説明されています。当時はシェール革命もなく、原子力や再生可能エネルギーという言葉の響きも今とは異なりますが、この精神は今も変わらないと言っていいでしょう。また石油開発技術センター年報平成元年度版では「研修期間は 1 コース約 3 ヲ月間であり、コース内容は例えば実際の油・ガス田のデータをコンピューターで処理する演習や、現場研修が中心である。また、この機会に日本をより広く知ってもらうことも本研修の一環であるので、このため、日本紹介のオリエンテーション・プログラムや、国内小旅行が企画・実施されている。」と記述されています。このように初期の通常研修は 1 コースあたり 12 週間の課程でしたが、コース構成の考え方は変わっていないと言えるでしょう。IT 環境は現在と全く異なり、また技術レベルも国により事情を異にする状況下での研修は講義の流れも違ったものであることは想像に難くない所です。日本でも職場にパソコン 1 人 1 台が普通ではなく、インターネットも携帯電話もこれからの時代という頃の話です。

3.3 研修生はどこから来ているか

平成元年からの研修生の招聘状況を見てみますと、その人数の面で表したのが図 2 です。通常研修は 1 年間に 2～3 コースのペースで恒常的に開催していますので年度毎に目立った変化はありません。「地道な努力」を象徴してい

図 1 平成元年 初の研修生

第 1 回「海外技術者研修」物理探査コース修了式にて。橋本総裁（下段中央）並びに日下技術センター所長（下段中央左）を囲む研修生

出典：TRC News No.59, 1989.12
石油公団石油開発技術センター編

図 2 産油国研修累計参加者推移

ると言えるでしょう。特別研修はやや様相が異なります。実はこの特別研修の方が通常研修より累積招聘人数は多いのです。その人数の多いのがイラクです。大資源国であり戦乱からの復興を目指すイラクからは日本・イラクの政府間合意により 1,000 人研修、500 人研修の名の下、短期間に多くの研修生が日本を訪れました。

表3 産油国技術者研修の参加国

中国, マレーシア, インドネシア, タイ, カンボジア, ミャンマー, バングラデシュ, ベトナム, ブルネイ, パプアニューギニア, フィリピン, イラン, イラク, サウジアラビア, UAE, オマーン, カタール, クウェート, イエメン, シリア, トルコ, エジプト, アルジェリア, アンゴラ, スーダン, ガボン, ザイール, ナイジェリア, タンザニア, ガーナ, ウガンダ, リビア, 赤道ギニア, ケニア, モザンビーク, カザフスタン, アゼルバイジャン, ロシア, トルクメニスタン, ウズベキスタン, メキシコ, ペルー, ベネズエラ, コロンビア, ブラジル, エクアドル, モンゴル (日本を除く)

この研修においてはJOGMECの技術者も講師だけでなく受講生として参加することがあるのですが、日本以外でこの研修生を派遣した機関の国元はこれまで47カ国に及びます(表3)。そしてこれを5年ごとに追ってみると以下ようになります。

・平成元年度 第1回 7カ国

アジア 中国, マレーシア, インドネシア, タイ
中近東・アフリカ UAE, オマーン, エジプト

日本の石油上流関連会社が探鉱開発事業に関わっていた国です。

・平成5年度 17カ国

アジア 中国, マレーシア, インドネシア, タイ, ミャンマー, ベトナム, パプアニューギニア
中近東・アフリカ イラン, UAE, オマーン, カタール, イエメン, トルコ, エジプト, アルジェリア, アンゴラ
中南米 ペルー

通常研修では1コースあたりの受講人員は20人前後であり、研修生は1カ国あたり1~2名と国別人数に大きな偏りを避けるようにするため、コースごとに派遣元の国籍が大きく変化しない限り、国数は20カ国前後になります。

・平成10年度 21カ国

アジア 中国, マレーシア, インドネシア, タイ, カンボジア, ミャンマー, ベトナム, PNG, カザフスタン, アゼルバイジャン, トルクメニスタン
中近東・アフリカ イラン, UAE, オマーン, カタール, イエメン, アルジェリア, アンゴラ
中南米 メキシコ, ベネズエラ, コロンビア

この頃はカスピ海沿岸のプロジェクトに注目が集まっていました。

・平成15年度 19カ国

アジア マレーシア, インドネシア, タイ, カンボジア, ミャンマー, ベトナム, パプアニューギニア, カザフスタン, アゼルバイジャン
中近東・アフリカ イラン, サウジアラビア, UAE, カター

ル, クウェート, エジプト, アルジェリア, リビア

中南米 メキシコ, ベネズエラ

中国の名前が見えません。資源国としての関心が他国に移っています。

・平成20年度 20カ国

アジア マレーシア, インドネシア, タイ, カンボジア, ベトナム, カザフスタン, ウズベキスタン

中近東・アフリカ イラン, イラク, UAE, オマーン, カタール, アルジェリア, アンゴラ, ナイジェリア, リビア

中南米 メキシコ, ベネズエラ, ブラジル, エクアドル

・平成25年度 26カ国

アジア マレーシア, インドネシア, タイ, カンボジア, ミャンマー, ベトナム, パプアニューギニア, カザフスタン, トルクメニスタン, ウズベキスタン

中近東・アフリカ イラン, イラク, UAE, オマーン, カタール, アンゴラ, ガボン, ナイジェリア, タンザニア, ガーナ, ウガンダ, リビア, ケニア, モザンビーク

中南米 メキシコ, ベネズエラ

アフリカは西側が資源国として有名ですが、東側の関心が高まっています。

この25年の間、毎年いずれかの研修に参加している国はインドネシア, イラン, UAEの3カ国です。そして人数ではイラクが最も多く、続いてUAE, インドネシアの順になります。

4. 研修生は何を体験しているか

それは勉強に決まっているじゃないか、という声が聞こえてきそうですが確かにそのとおりで、TRCにてコース開催する場合は平日の朝9時から夕方4時頃までは当該専門分野の座学が行われます。しかしここではそれ以外のお話を紹介します。先に「日本をより広く知ってもらいたい」とも本研修の一環」と述べましたが、短期滞在ながら日本を良く知り、日本を体験してもらいたい、という言わば「おもてなし」の話です。と言っても決して特殊な裏技のことではありません。

産油国から参加する研修生は次代の国を背負う存在として期待されていると言っていいでしょう。人材育成は古今東西の重要課題であり、送り出す組織からすれば自社スタッフに視野を広げてもらうべく長期出張に出すことになります。研修生を受け入れる側からすれば、その時々の方の代表を迎えることなので、とにかく好印象を持ってもらうことに努力します。研修生が帰国のフライトで飛び立つ時「日本に来て良かった」、帰国後に仲間や上司に報告する時「日本に行って良かった」と感じ、話してくれることが願いです。

4.1 食のこと

美味しいものを食べれば幸せな気分になり、逆に食から来るストレスが苦しいものであることは誰しも共通です。ですから研修生が来日するとまず食の調査を行います。牛肉、豚肉、鶏肉、羊肉、魚、エビ、カニ、貝、イカ・タコ、卵、アルコール、その他についての宗教上、健康上（アレルギーなど）、嗜好のアンケートです。食事について宗教上の配慮を行うことは当然で、イスラム教徒が研修に参加している時のTRCにおける食事はハラール食で安心なのですが、研修活動の中で外食する機会も多いので、この食の調査は重要です。研修生のTRCでの食事は研修生以外のJOGMECスタッフと同じ場所で取りますが、専用の特別コーナーを設けてハラールなどの必要な対応を行います。

食事メニューは一般的レベルで贅沢な要素はありませんが、一国集中型の特別研修ならまだしも多国籍の研修ではいろいろな食に対する注文が寄せられます。

4.2 HSE

日本に居住する人でゴミの分別や防災の意義を知らない人はいないでしょう。このHSEの中で特に緊急時対応の訓練が重要であることは2011年3月11日の東日本大震災の例で身に染みている所です。いよいよ研修が開始するという講義初日には必ず緊急時対応の訓練を行います。地震が来ればまず机やテーブルの下へ、というのは日本では良く指導されることですが、この「机の下へ訓練」と保安帽を着用しての避難集合場所への移動訓練は必ず行い、また起震車を利用しての模擬地震体験も行っています（図3）。この東日本大震災の時は通常研修の講義中で、TRCも震度5級の地震が襲いました。日本人は屋内で様子を見ていましたが、研修生は保安帽もそっちのけで屋外に一目散だったそうです。しかし訓練どおりの対応は日本人でも難しいものでしょう。

4.3 日本文化の紹介

外国の人にとっては「日本の首都は東京」というのは必ずしも常識、認知されているわけではないとの報道が最近ありました。関西・京都周辺だけを旅行したのに東京に行ったと思う勘違いから首都は京都であるという誤解まである

図3 緊急時対応訓練

ように、これはアジア諸国よりも、遠く離れたヨーロッパ諸国で正確な認知度が下がる傾向だそうです。もっとも、教育レベルが高いとは言え日本人でも世界地理に関する知識レベルが一般論として高いかは疑問でしょう。日本のことを知るのは研修生にとっても大きな関心事であり、研修開始後の数日間は日本紹介の時間を設けます。通常研修での最近の例を紹介すると以下のようなものです。日本の現代史だけでなく時事問題にも対応しています。

- ・ よりよい滞日生活のために

日本での実生活に役立つ日本のマナーと習慣、日本の地形、自然、天皇制、年号など

- ・ 経 済

占領時代の経済政策、戦後の発展、アジア経済発展の要因、東日本大震災の影響、アベノミクス、少子高齢化など

- ・ 歴史と文化

江戸時代の開国、尊王攘夷、明治維新、明治政府による近代化、日清・日露戦争と2度の世界大戦など日本近代国家としての歩み、戦後の復興、平和国家、今後の課題など

- ・ 教 育

江戸時代の教育制度、明治政府による教育の近代化、戦後の教育の民主化、現在の問題点（ネット社会でのいじめなど）

- ・ 生け花デモンストレーション

講師の指導の下、研修生各自が生け花の作品に挑みます。この他に書道、折り紙、和室体験での浴衣試着などがありますが、忘れてならないのが週に2度程度開かれる日本語教室です。この日本語教室は研修生の人気もおしなべて非常に高く、話しかける時は日本語でとお願いされることもある程です。通常研修の送別会では研修生の日本語スピーチが恒例となっており、この成果が発揮されます。

研修のテーマに応じた現場見学、関連技術を擁する会社・工場訪問は都度行われています。国内の上・下流産業、重化学工業、環境技術系産業などへの訪問は広い意味で日本文化の紹介と言えるでしょう。これらとは別に日本文化紹介として実施する代表的なものとして、週末を利用しての東京または富士箱根方面などへの日帰り遠足、そして3～4泊の関西方面（京都、広島）旅行があります。京都では金閣寺、清水寺という定番所、広島では平和記念公園や宮島を訪問します。日本の伝統文化に触れる浅草や京都も人気がありますが、研修生の人気No.1は何と言っても広島です。やはり広島は「ヒロシマ」として世界中で有名な場所です。（図4）

4.4 研修生との交流

前述のように「産油国との人的絆・協力関係をより一層深める」というのは本研修事業の狙いです。そこで各研修開始時の歓迎会または修了式後の送別会にはJOGMEC外部の方に案内を出し、研修生との交流機会を設けています。日本側にとっては将来のビジネスチャンスや情報収集という面で期待するでしょうし、研修生にとっては来日の1つ

図 4 広島周辺見学

の成果として捉えているようです。「研修生との交流」という表現は研修生と日本人あるいは産油国と日本との関係を思い浮かべるでしょうが、研修生同志の交流という副次的効果もあるのは気づきにくい所です。この研修事業の機関紙である「NEWS LETTER」は平成2年に創刊され、研修修了生、各国の研修担当窓口、国内の研修協力各社、大使館に送られています。研修事業の現状報告や研修生紹介、修了生からの寄稿などにより構成されており、言わば同窓会会報のような存在で、研修生同志の交流の一端にもなっています。研修生との交流は滞日中やメールなどの通信だけのことなく、国別ではあるものの参加国現地において同窓会を開催することがあります。この同窓会には日本

表 4 研修スタッフの苦労話

- ・自分のカメラの充電のために、宿泊室のテレビのコードを切断。
- ・休日、都内で職務質問をかけられ、パスポート不携帯だったため、警察署に連れていかれた。研修課長が迎えにいったものの、なかなか解放してもらえなかった。これを契機に、パスポート携帯の徹底、TRC 最寄り警察署への研修生情報提供、JOGMEC 発行身分証明書への警察署電話番号記載を行うこととした。
- ・来日早々泥酔しておまわりさんが TRC まで送ってくれた。
- ・お花がきれいだからと民家の庭を撮影したら通報された（塀の外から）。
- ・ヘビースモーカー研修生が喫煙所以外でもすぐに煙草を吸いたがり注意を繰り返してたら、研修生はふざけて金閣寺の敷地内で煙草を出して吸う素振りをして研修課同行者に見せつける。係の人に研修課同行者が怒られた。
- ・イラク研修の出迎え出張の際、研修生数名が飛行機出発間際になってお祈りをしに行ってしまう、危うく乗り遅れそうだった。
- ・来日予定日に研修生が飛行機に乗っていないことが判明。確認のため電話したら普通に電話に出て、出発は明日でしょ？と日にちを間違えた様子。
- ・休日外出中に、転倒し足を骨折。入院・手術となった。車いすを使用し、JOGMEC から 1 名同行し、帰国の途に。
- ・インフルエンザにかかり隔離。研修生の講義を受けたい思いが強かったので休んでいた分の講義を録画して研修生に提供。
- ・関西旅行中、最初の見学地京都駅の階段で足を踏み外し、捻挫。腫れがひどく、研修続行が不可能だったため、翌日、捻挫した研修生は TRC に戻ることに。同じコースの別の研修生が妊娠していることが分かり、つわりがひどく、この研修生も捻挫した研修生とともに TRC に戻るようになった。さらに、広島で研修生同志の仲たがいがあり、研修生 1 名が旅行途中で TRC に戻ることもあった。このコースの関西旅行では、合計 3 名の研修生が途中離脱することとなった。関西旅行にアテンドしていたスタッフがその都度、駅まで送迎し新幹線に乗せ、東京駅で研修課のスタッフがピックアップした。
- ・最初のイラク研修時、砂嵐により飛行機が飛ばず、数日待機した後、バグダッド空港からヨルダン（アンマン）まで陸路にて移動した。
- ・新潟に行くために海浜幕張駅から東京駅に向かうとき。海浜幕張駅始発の電車で出発を待っていたら、何を思ったのか研修生 1 人が電車から降りた。その途端ドアが閉まり、研修生 1 人を残して電車は出発。研修生を何とか東京駅までこさせ、東京駅で合流しグループを追いかけて新潟へ。携帯電話を持たない研修生と東京駅での合流は苦労した。
- ・イラク研修の研修候補者が開講間近に全員入れ替わり、開講を 2 週間遅らせることになった。
- ・関西旅行へ向かうとき。強風のため京葉線は動いていない。総武線は動いているとの情報から、幕張本郷駅から東京駅に向かうことに。途中で止まったりしながら 2 時間くらいかけて東京駅到着。どうにかその日の行程を全部こなす。
- ・関西旅行へ向かうとき。早朝に大きめの地震があり京葉線が大幅に遅れている。来た電車に乗ったものの、途中で車両故障が発生。東西線に乗り換えるよう車内アナウンスがあったが、バス移動をしなければならない。研修生＋荷物の団体移動を考えると乗り換えたところで予定の新幹線には乗れないと判断し、そのまま待機。2 時間くらいかけて東京駅に到着。やっと新幹線に乗ったら、研修生の 1 人が高熱を出して震えだす。京都についたらその研修生は病院へ。その後回復。
- ・関西旅行の京都駅から広島駅への移動するとき、大雨で新幹線が止まり 2 時間くらい京都駅で待機させられた。
- ・3.11 の震災時には世界中の研修生から心配のメールや電話をもらった。
- ・日本で災害のニュースがあるとメッセージをくれる研修生が多数。
- ・タクシーやバスの中に忘れ物／落し物をした研修生が、自分の物が戻ってきて驚いていた。

側から JOGMEC スタッフだけでなく現地の日本企業も参加します。研修生からすれば国を縦横に越え、時間を越えての人的交流が経験できる仕組みになっています。

通常研修の場合滞日期間は10週間であり、1年間の約5分の1に相当します。そうなたかなりの確率で期間中に誕生日を迎える研修生が存在することになります。小さなことですが、そのような研修生には研修担当課各人のお祝いの言葉を入れたバースデーカードを贈ります。年齢を1つ重ねることの意味は人それぞれでしょうが、誕生日を祝ってくれることの感慨は万国共通のようです。

5. 研修生を迎える現場は苦労が絶えない

ここまでは研修生の話でしたが、迎える研修担当課内のスタッフについてもここで紹介しておきましょう。先に述べたこの「おもてなし」には研修生の滞日中の生活一般の面倒も含まれるので、必然的に担当スタッフの中心は女性になります。石油上流関係の方にとっては外国人との交流は日常茶飯事であり、初対面の人を相手にする場合もあれば気心承知の相手とビジネスを進めることもあるでしょう。研修担当スタッフの一番の特徴といえば、大抵が初来日である多国籍の互いに初対面の研修生を一度に相手する、ということでしょう。講座本体のアレンジから渡航、滞日中の身元引受け、健康管理までも「おもてなし」の一環ですから夜も休日も安心できないのが実の所です。スタッフにこれまで記憶に残る出来事を尋ねたところ、返ってきた答えが表4に示すものです。次のコースは何事もなければいいが、と思いつつの25年が「地道な努力」と言ってもいいでしょう（もちろん何事かは必ずあります）。さて余談ですが、表4中にある東日本大震災の時は通常研修探鉱地質コースの真最中で18人が参加していました。福島第一原子力発電所の事故や計画停電の不安から、3週間の課程を残し全員が急遽の帰国となりましたが、同年11月に12人が再来日を果たし、全課程を修了しました。

6. 終わりに

2014年11月に JOGMEC が主催する Techno Forum 2014 がパレスホテル東京にて開催されました。これは産油産ガス国が求める技術ニーズと日本のさまざまな産業が開発保有している先端・先進技術の出会いの場を設けるための、JOGMEC が推進する技術ソリューション事業の1つですが、この会議の場に UAE アブダビ国営石油会社 (ADNOC) の Director of Strategy & Coordination である Ali Khalifa Al Shamsi 氏が参加されました。この人物は本稿で紹介した、平成元年に開始した記念すべき初回の物理探査コースの研

図5 初回の研修生 Shamsi 氏（左）と筆者

出典：JOGMEC NEWS Vol.39, 2014 Dec.
石油天然ガス・金属鉱物資源機構編

修生です（図1の後列右から2番目の人物）。そしてこの機会に産油国技術者研修 OB としての同氏に話を伺うことができました。（図5、石油天然ガス・金属鉱物資源機構 2014 JOGMEC NEWS Vol.39）同氏に当時の写真を見せながら思い出を語ってもらったのですが、当時の TRC 周辺の幕張地域にはまだ何もなかったこと、同期生や研修担当スタッフ個々の顔と国籍など実に鮮明に記憶されていたことが印象的でした。筆者も25年前に苦労された方のことを思い出しました。誰しも1年経てば1つ年をとり、やがては現役を退く時が来ます。この「地道な努力」を継続し、願わくは研修生 OB の存在が産油国の現役として途絶えることがないことを祈る次第です。さて重要なことですが、この産油国技術者研修事業の25年は石油公団や JOGMEC の中だけの歴史ではありません。我が国の技術力を伝える関連業界の継続的かつ多大なご協力によりなし得た四半世紀であることを強調したいと思います。そして変わらずにこの努力が続けばと産油国技術者研修事業の半世紀を振り返る日のことを思い浮かべました。

引用文献

- 池ヶ谷清貴, 2014: Win Win の関係築く産油国研修事業。石技誌, 79(4), 234-242.
- 石油公団石油開発技術センター, 1989: TRC News No.59.
- 石油公団石油開発技術センター, 1990a: TRC News No.60.
- 石油公団石油開発技術センター, 1990b: 石油開発技術センター年報 平成元年度, p415.
- 石油天然ガス・金属鉱物資源機構, 2014: JOGMEC NEWS Vol.39.